



新連載  
ぶっちゃけインタビュー①  
空門勇魚さん（ろうかくど）  
NHK大阪放送局・ディレクター

## 障害者と笑おう！

NHKのテレビ番組「バリバラ」は、障害者が出てきて、障害者を笑う。初めて見たとき、顔がこわばった。「ボクも、障害者を笑っていいの？」けれど、よく考えれば、大阪のおばちゃんは、おばちゃんを笑う。サラリーマンは、サラリーマンをコケにする。感動したり、同情するのは、自分とは違う人だけれど、笑ったら、仲間になる。気持ちよく笑えるようになって、とても楽になった。「バリバラ」よ、よくぞ、大阪で生まれてくれた。

「がんばっている障害者は、もつ、いい。」

空門さんは、NHKに入局以来、担当はずっと障害者がテーマの番組です。最初「バリバラ」の前身と言える「きらら」といえる」という番組を担当しました。多分日本のテレビで初めて、障害者だけをスタジオに呼んで話を聞く番組です。一九九九年に開始して、当時としては画期的な番組だったそうです。視聴者は、やはり障害者？

「いえ、一般の視聴者も対象です。みんなに見てもらいたいというつもりでつくっていました。

登場するのは、健常者が見て「励まされた」とか「ハンディをもって一生懸命やっている。すごい！」という人？

「とにかく「きらら」といえる」人を見つけてきてその人を紹介するので、キラキラしている人、頑張っている人ということになるんですかね、うーん…。

「バリバラ」が生まれるのは、いつですか。

「二〇一二年の四月から「バリバラ」に替わるんですけど、試行期間があつて二〇一〇年の四月から二年間は、「きらら」といえる」の番組の中で、月の最終週にやっていました。

始まったきっかけは？

「二〇〇八年の八月頃、視聴者から「番組に出てくる障害者は「ハードルが高すぎる」という旨のハガキをいただきました。ものすごく頑張っている人、勇気を与える人、感動を与える人は、もう、いいよ、というような意見でした。震災の被災者に「がんばって」は、もう、いいよ、と言われるようなものですね。」

「そのハガキがきっかけになって、「きらら」と改革委員会」を立ち上げました。番組への感想を障害者の人たちに聞くという試みを二、四回やりました。そのまま番組としても流しました。

結局、僕ら制作者は障害者のありのままの姿についての描いていないんじゃないかと。頑張っている側面しか描いていないんじゃないかと…。集約すれば、そんな結論になりました。

ヒーローじゃなく、ふつうの障害者を出せばいい。

「でも、障害者のありのままの姿を映すつていうのはどうしたらいいのか。話し合っている中で、僕らが取材に行つて番組に取り上げなかったんだけど、おもしろかった話を取り上げればいいんじゃないか、と考えるようになりました。取り上げなかっただけで、ネタはあつたんです。」

里見喜久夫（「コトノ」編集部）=インタビュー  
interviewer.text by Kikuo Satomi  
岸本 剛=写真  
photograph by Tsuyoshi Kishimoto